

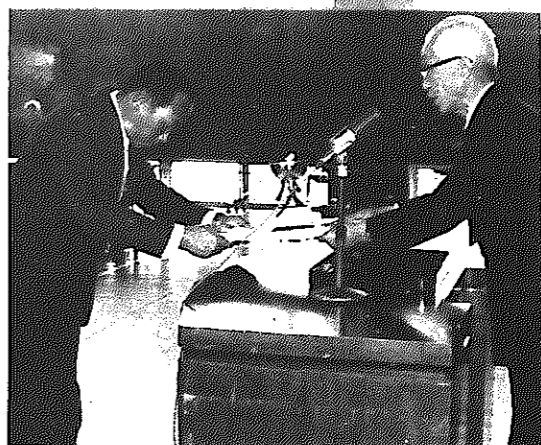
まちかど



ん には

麦作で10アール623キログラムの収量をあげ全国表彰

大久保次善さん (能登三・農業・46歳)



3月28日の「うまい米豊産推進大会」で、市麦作共進会最優秀賞を受ける大久保さん

昨年、一・三畝の大麦を栽培し好成績を取った大久保さん。十町当たり収量が六二二・六七、品質もすべてが一等となり、市麦作共進会、県麦作共進会で、ともに最優秀賞を受賞、そして昨年の十二月十日に全国米麦改良協会から表彰されました。

「いやあ、まぐれですよ」と、いくぶん謙そん気味の大久保さんは「作付場所は、ほ場整備にかかったところなので、用水を切ることでできたのが良かったのでしょう。それにあの場所は土質が良い



「昔と違い、麦の栽培技術は高度になってますね。まだまだ勉強が必要ですよ」

せいか、稲を作っても非常によく取れたんですよ」と話します。水田六・五畝、畑〇・二畝を耕作している大久保さんは、減反が年々強化されてきたことから、五年に〇・五五畝の大麦の転作に取り組み、徐々に面積を広げました。「最初の年は、農業改良普及員の指導を忠実に守ったので、うまくいったんですが、二年めは失敗しました。一年めの実績に安心したこと、長雨にたたられ種まきが遅れたことが失敗につながったようです。こんな教訓を生かし、去年は雨が降り続く中でも、傘をさして無理やり種をまいたそうです。

麦は気象条件に左右されやすいのが悩みのタネと言われています。今年は雪の消えるのが遅かったため、生育がかなり遅れています。大久保さんは「麦でも良い作柄をあげられれば、転作奨励金など合わせ、米を上回る収入になります。今後も転作は避けて通れないと思いますので、栽培を続けていきます」と意欲的に話っていました。

別れ、出迎えた白根の玄関口

語る人

皆澤英太郎さん(七五)

〔五六の町五〕

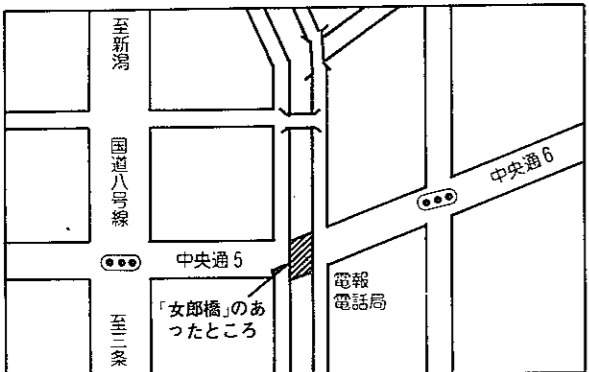


「白根横町は忘れはしない。泣いて別れたこともある」野口雨情の作詞で、昭和の初期に嵐音頭とともに作られた白根小唄の一節です。よく昔の風情を表現したものだと思っています。小学校を終えてでっち茶公に、

また軍隊に、そして大志を抱いて上京する人たちが「達者でな」元気でね」と哀感を胸に秘めて別れを惜しんだ場所。それが女郎橋です。

この橋は、横町の東端の、現在電報電話局の西側を流れている小川に架けられていました。ここは当時、白根の玄関口となっていて橋から先は見渡す限りの田園風景でした。そして、矢代出駅に通じ、故郷を離れていく人、帰る人、みんなこの橋で別れ、そして出迎えたことが今、懐しく感じられます。

私の思い出 昔のわが街



白根横町の女郎橋

白根 人物伝

★保倉玄朝

医師、保倉神方(葉)の創始者。白根の医師玄童の子で、安永六年(一七七七年)に生まれた。名は弁次郎、博愛堂または普濟庵と号した。父は磊落不羈で借財多く、玄朝はこどものとき、生計のため席

画、卦、軍談語などをやった。長崎斎翁の伝える毒薬といって内外七十二の病にきくという薬、十数種をつくり、文政六年(一八二三年)九月に、門前へ大書して宣伝した。保倉神方といって名聲があがり、これを販売する三千余家に及び、中でも面場薬が有名であった。こうして家をおこし、五の町に大邸宅を構えた。晩年仏法を深く信じ、また貧しい人を助けた。二世安楽教訓書の著書がある。天保九年(一八三八年)五月十五日に六十一歳でなくなった。

(中蒲原郡誌から)

★渋川宗寿

豪農、外科医師。旧大郷村大婦新田の豪農、長崎でオランダ流外科医学を学び、帰郷して村で開業、当時としては新しい医学で人々の病氣治療にあたった。(越佐農民の歩みから)



「私の思い出 昔のわが街」欄へあなたの思い出の場所を。連絡は企画財政課広報広聴係へ。